

3 暮らしと川

庄内川が育んだ豊かな土地に稲作が行われた頃から松河戸の歴史は始まります。

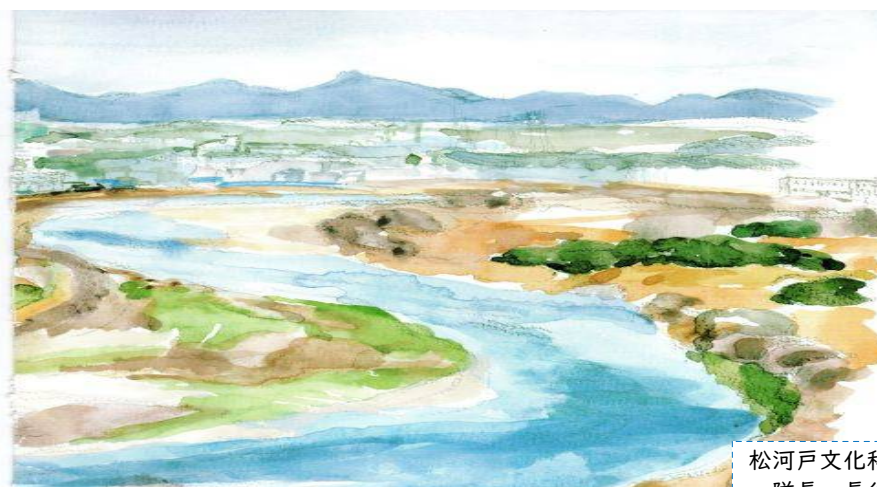
氾濫が頻繁に起こったものの、それによってもたらされた肥沃な土地と豊富な水で人々を寄せ付けました。

人々は川沿いに住み自然の恵みを得ながら、時には自然の猛威や時代に翻弄されながらも恵と工夫により力強く生きてきました。

今、川辺には、四季折々に植物が自生し、花や実を求めて鳥や虫が飛び回り、川にはアユやフナなどが泳ぎ、子ども達が遊んでいます。

庄内川なくして、松河戸をはじめとした川沿いの村々の変遷を語ることはできません。先人たちが、庄内川と向かい合ってきた暮らしについてみてみます。

- (1) 松河戸の川 p132
- (2) 治水対策 p134
 - ①水運としての利用、②住民による治水対策、③行政による治水対策
- (3) 防災意識の高まり p142
- (4) 洪水被害 p143
- (5) 渡しと橋 p146
 - ①仮橋の時代 ②本格的木造土橋 ③現在の鉄筋コンクリート橋
 - ④環状2号線の庄内川大橋
- (6) 美しい川 p149
 - ①庄内川の思い出、②地藏川の思い出
- (7) 地藏川のむかし話「魚と文太」のおはなし p152



庄内川 松河戸から東に高蔵寺ニュータウンを望む

松河戸文化科学探求隊
隊長 長谷川 浩
080-3657-7052
松河戸町の沿革ホームページ
<http://matsukawado.com/>

(1) 松河戸の川

松河戸は、春日井市の南西端に位置し、庄内川と地蔵川(巾川)の氾濫によって堆積された極めて肥沃な沖積地にあり、古くから稲作がおこなわれてきました。

庄内川は、川沿いの人々の生命と暮らしに多大なる恩恵を与えながらも、幾多の洪水氾濫を繰り返してきました。

この川は、岐阜県恵那市の夕立山(標高 727m)を水源とし、東濃(瑞浪、土岐、多治見)の盆地を流れ、県境の玉野川溪谷を抜けて濃尾平野に出て、春日井市内でも幾つもの支流と合流し、名古屋市西区で矢田川と合流して港区の伊勢湾に注ぎます。

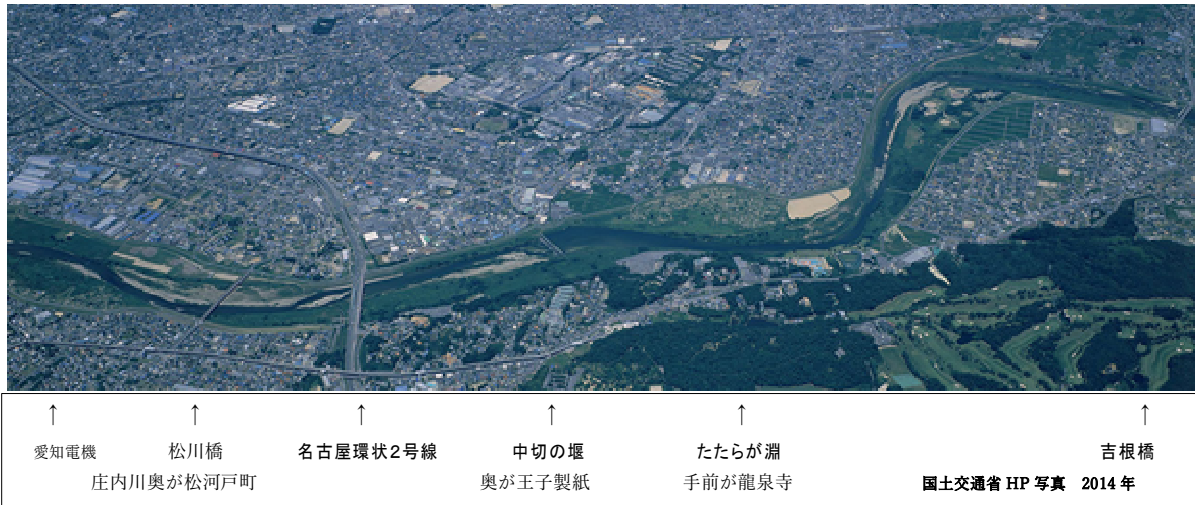
古くから岐阜県では土岐川、岐阜と愛知県境の玉野川溪谷では玉野川と呼ばれており、その沿線の地名などでいろいろ呼ばれて、一貫した呼び名はありませんでしたが、江戸時代に農業集落である山田庄(現在の名古屋市西区付近)などの庄の内を流れていたのが庄内川と呼ばれるようになったと言われています。(松河戸の人達は大河と呼んでいました)

昭和 39 年(1964)制定の新河川法において基本的には源流から河口まで同一の名称(一級河川の庄内川)で統一されていますが、この川は、今でも地域において古くからの別称で呼ばれています。

延長 96Km、流域面積 1,010Km²の河川で、春日井市の南の市境をながれている距離は 19.3 Km で、松河戸は河口から 24Km~26Km の位置にあります。



庄内川（愛知電機辺りから吉根橋付近）



山地、丘陵地形を経て低位段丘面にさしかかる気噴町付近から大きく蛇行し、流域では河道の変遷に従って自然堤防と後背湿地が複雑に入り組んだ地形が発達し、松河戸町周辺から勝川町・名古屋市北区にかけては広範囲に沖積地(湿地帯)を形成して、松河戸辺りから下流は天井川となっています。

弥生時代の頃、こうした湿地帯を利用して稲作が始まり、春日井市内では松河戸遺跡において市内最古の稲作のムラ(環濠集落)が確認されています。

今は強固な堤防で守られていますが、堤防の整備が十分でない頃、自然堤防の時代は雨期を中心に頻繁に洪水が起こり大きな被害が起こっていました。

松河戸には、室町時代 15 世紀後半から語り継がれている十五の森悲話をはじめとする被害記録や伝承のほか、洪水に備えた水屋も多くみられました。

また、地藏川(巾川)は、春日井市金ヶ口地先に端を発し、松河戸の北側を流れて追進町付近で八田川の下をくぐって、新川に合流し庄内川と並行して伊勢湾に注いでいますが、昭和 33 年に改修工事が行われるまでは庄内川に合流していました。

田からのあく水(余り水)を集めて一番低い土地を堤防なしで流れていました。

現在は改修され堤防のある川になっていますが、かつては庄内川が増水すると逆流して地藏川が越水したものでした。



戦前の地藏川(巾川)
堀川なので堤防が築かれていない

庄内川の左岸は守山の丘陵地となっていることから、右岸の上条から松河戸にかけて、大雨で川はいくたびも流路を変えていました。また地藏川は越水して田畑を水没させていました。

今でもその沖積土の中には多くの遺跡が残っており、川などのかつての流れは、集落・畑(自然堤防)と水田(旧河道)などに痕跡を残していましたが、区画整理事業により旧地形や農村的な原風景は市街地へと変貌し、伝承的な習俗・風習も失われつつあります。

(2) 治水対策

① 水運としての利用

この川は古墳時代から交通路が存在していたと考えられています。(庄内川流域を中心に展開している弥生時代の遺跡から、勝川廃寺瓦は高蔵寺瓦窯で焼かれ庄内川で運ばれてきたと言われています。)

庄内川とこれに沿う玉野道は、古代から人や物が行き交い、文化・情報の導入路であったと思われます。

近世、庄内川(玉野川)に舟が運行していた記録は、古いところでは、清洲・桑名間の通船や新木津用水經由の犬山方面へのものが見られるが、高蔵寺方面への通船の記録はありません。

しかし、これに着目して、何とか通船しようと意志表示した願書は残っています。

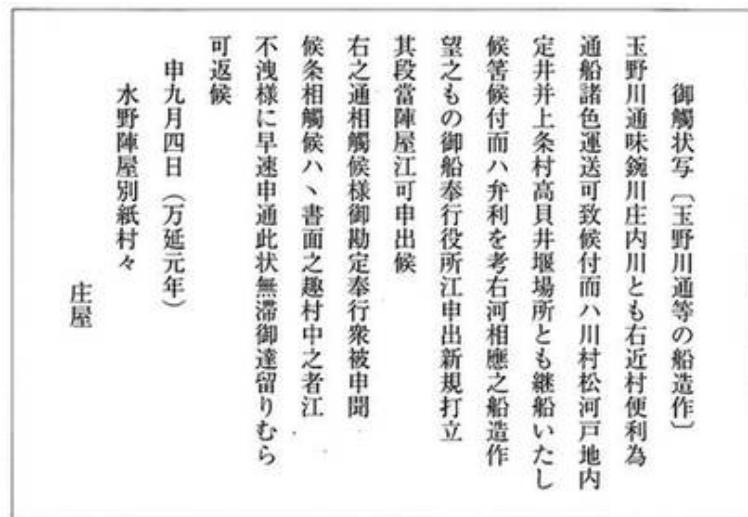
安政3年(1856)「玉野川通船願」や、万延元年(1860)「玉野川通船等の船造作」の資料から、庄内川水運の活用を求めている人もいたようです。

名古屋白鳥の商人からの「玉野川通船願い」の内容は、「玉野より下流は浅いが、底が砂なので舟行はできる。しかし、玉の井、桜佐、川村に堰があるので、南に寄せて改修し、川村御定井堰では荷を積み替えて運ぶので、通船を許可してください。」とあります。

水野陣屋から「玉野川通船等の船造作」について達せられている上記の内容は、「玉野川通は諸色運送に便利なので、川村、松河戸地内の定井、上条村高貝堰とも継船すれば便利なので、船の造作を新規に望む者は船奉行へ申し出よ」です。これにどれだけの申し出があったかはわからないが、井堰で継船して荷物を運送する方法が行われていたことがうかがえます。いずれにしても荷物があつたときに沿岸の船頭同士で連絡をとって運んでいたようで、定期的な船運は成立していなかったようです。

明治時代になると、行政も積極的に庄内川の活用を考え、明治10年9月の「愛知県布達」に庄内川分水工事の掲載がされ、

- ① 木曾川と庄内川の水を堀川へ引水させ浄化と水量増加を図る。
- ② 犬山から新木津用水の幅を広げ(黒川治愿くろかわはるよしによる新木津用水改修しんこつようすい)、庄内川から堀川につながる水路を造る。
- ③ 味鏡村から下水野村に至る庄内川を改修して水運を円滑にする。との達しが出されました。



「玉野川通船等の船造作」の願い



松河戸の渡し付近を航行する船。(明治33年頃)
山の上に龍泉寺が見える
白沢小学校15周年記念誌『白沢のながれ』より。

明治19年まで待つこととなりますが、味鏡村の水分橋辺りから玉野村と下水野村に至る通船路は整備されて、庄内川の中流水域水運は一部開通しました。

近世には庄内川の水を用水として利用する施設が沿岸の各地で築造され、杣から安定して導入するため、川全体を堰き止める井堰が築造されたので、船の運航が困難となって庄内川通運は、渡しと近隣中心の継船利用に限定されました。中央線開通以降は継船利用も行われなくなりました。

参考資料

郷土誌かすがい第66号

郷土誌かすがい第73号

② 住民による治水対策

庄内川は、今は強固な堤防で守られていますが、自然堤防の時代は頻りに洪水による大きな被害に遭い、松河戸には、今も「十五の森治水悲話」が室町時代15世紀後半から語り継がれています。

また、稲作耕作には、安定した水も必要でしたので、古代から住民にとって、庄内川、地蔵川の治水は最も大きな課題でした。

明治になってからも庄内川堤防決壊は多くの場所でありました。しかし、松河戸地区は、地蔵川の溢水による被害はたびたびありましたが、明治元年(慶応4年8月)の庄内川一部決壊以降は堤防決壊における大きな被害はありません。

松河戸の人達は、度重なる水害に遭ったことでいろいろ工夫も凝らしました。

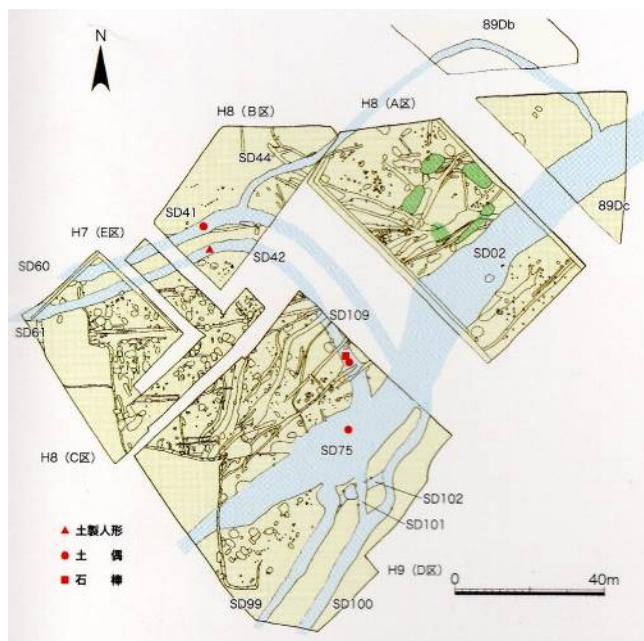
① 松河戸遺跡の環濠集落

春日井市内では、松河戸遺跡において市内最古の稲作のムラ(環濠集落)が確認されています。

環濠の埋土には、洪水など大水による砂を含む堆積があり、また一度埋まった環濠を掘り起こした状況が確認されており、河川の増水で土砂が埋積したと考えられます。

この時代の環濠集落は、敵から村を守る防御施設の役割が多かったのですが、この環濠集落は、集落を一周することなく南側が開放状態になっていることから、集落内の排水、水利あるいは水害を防止する治水施設としての性格を有していたと考えられます。

【参照(P329) 14 松河戸遺跡】



松河戸遺跡の遺構



環濠内の土層堆積

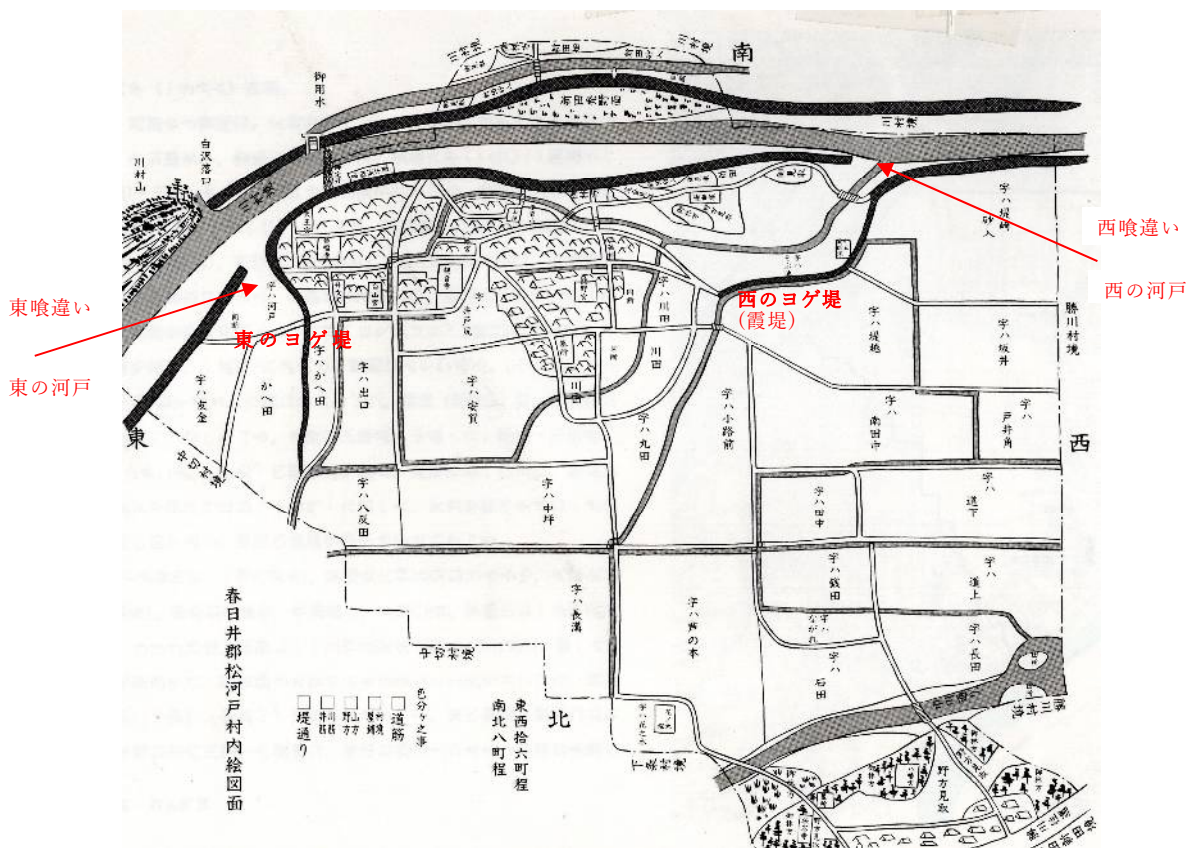


二重にめぐる環濠

② ヨゲ堤などの工夫

江戸時代の「松河戸村絵図」には東と西に堤防の切れ目があり、そこを排水路が流れていました。この水路の水門は片開きの大きな板戸で、通常は排水のため三分の一程が開放されていました。庄内川の水位が上昇すると、水圧によって水門が閉じ、集落や田畑を守るようになっていました。

春日井群松河戸村内絵図面「春日井市近世村総図集」天保12年(1840)



河戸	……………	灌漑用水(かんがい用水)を取るために堤防に作った坎(入り)のこと
松 (河畔林)	……………	堤防に、水害を防ぐため松が植えてあった。流し松
ヨゲ堤	……………	集落を守るために張り出した堤防
西のヨゲ堤	……………	ヨゲ堤というよりは霞堤で、集落に流れ込んだ水を排水する。

注 p155 には、原図入りで拡大した図が掲載してあります。

この、灌漑用水(かんがい用水)を取るために堤防に作った坎(入り)のことを「河戸」といいます。今も、その当時の場所に排水ひ管施設として使われています。

また、集落の東側を北北西の方向に、集落を囲む形で庄内川の堤防から「ヨゲ堤」が伸びていました。上流地域よりの大水を防ぐため、庄内川堤防から河川敷の反対側の中切境に高さ3~4メートル位の堤防が造られていました。

西の堤は、「ヨゲ堤」というよりは「霞堤」で、集落に流れ込んだ水を排水する役目がありました。川に面した土手一面に松が植えられ(流し松)、増水すると切り倒し、水が直接に堤防に当たらないような工夫もしました。

松河戸という地名の由来はこの、「松」、「河戸」から来たといわれています。また、この地域は庄内川底より低地だったので、水難を避けるため、蔵だけを母屋より1m以上高く盛土をして建てました。この工夫を「水屋」といっていました。

③ 堤内地、堤外地

堤防で守られている土地を堤内地、反対側の河川敷を堤外地と呼んでいます。

松川橋付近の上流側は、砂利が露出した川原となっていますが、下流は川幅が300m近くあって広く、堤防下の河川敷は畑として利用されてきました。

普通の農地(堤内地)としての扱いはされていませんでしたので、砂が多く芋などしか作れませんし、大水で水に浸かたりしましたが、そんな土地でも利用してきました。

昭和48年市制30周年の記念事業として松河戸グランドとして整備されるまで畑地として残っていました。



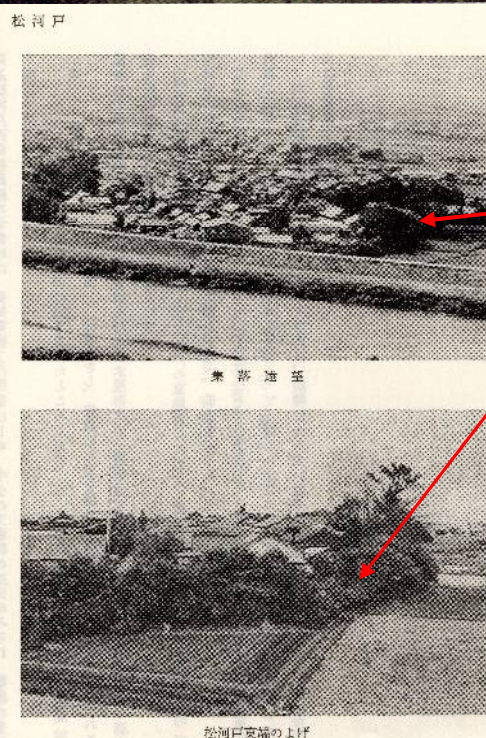
(上 図1枚) 昭和30年頃
写真と図表で見る松河戸
松河戸誌研究会

(下 図2枚) 昭和55年頃
春日井市史 地区誌編2

区画整理が始まる頃まであったヨゲ堤

上流地域よりの大水を防ぐために、松河戸の上流側の庄内川堤防から河川敷の反対側の中切境に堤防が張り出していた。これをヨゲ堤(余水堤防)といった。

ヨゲ堤の高さは3~4メートルあった。



東のヨゲ堤

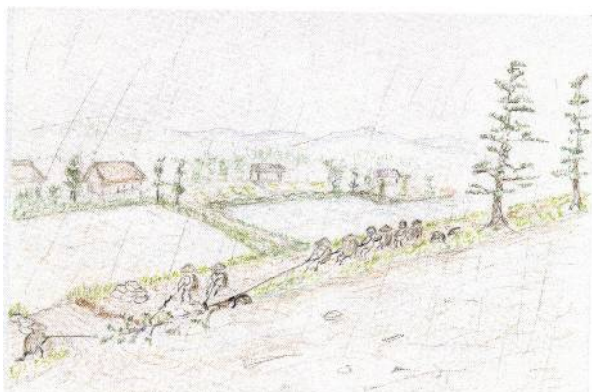


松河戸の西の河戸(坝)付近 写真平成2年8月
現在の松河戸排水ひ管施設



▲平成8年頃 くいちがい堤防 余所の地区では見られないが中切に1ヶ所、松河戸は東西に1ヶ所ずつあった。ここには大きな排水門があり、庄内川の水が増えると自動で門が閉り水は入らない。庄内川の水が引くと自動で門が開き部落内の水が流れでる。

松河戸の東の河戸(坝)付近
現在の松河戸排水ひ管施設



流し松(河川敷の松) 河畔林

堤防には松が植えられていたが、これは「流し松」といい、増水すると伐って堤防に横たえ、水が直接に堤防に当たらないようにした。(松は水に強く根をはるといわれている)



▲昭和34年9月26日、伊勢湾台風で被害した庄内川河川敷の松



水屋 昭和37年頃

向こうに見えるのが、母屋より1m以上も高く盛土して建てた蔵(水屋)



水屋 平成4年頃

③ 上条用水

『東春日井郡誌』によると、今から約 600 年前、応永年間（1394～1428）に、地元の郷士、林重之が開いたのが始まりといわれています。

別名「上条井」とも呼ばれ、当時の灌漑区域は、上条、下条、中切、松河戸、勝川の 5 ケ村でした。

寛文元年(1661)の洪水で、元杵と提 294 間が決潰したのを機に、杵・樋の改造ならびに水路の位置変更をはかり、その後何度か改修工事を施され現在に至っています。

文化 12(18015)年の「割符帳」によると、灌漑区域の村々の用水費は井元の上条を除いて、下条が 2 石 6 斗余、松河戸が 4 石 9 斗余、中切が 1 石 4 斗余、勝川が 1 石 2 斗余を負担しています。

上条用水が開削されると用排水路整備、農耕方法の改善も進み、麦作を裏作とした二毛作可能な耕地を拡大することが出来ました。

現在、用水は、吉根橋より下流 10 メートルのところにある堰で庄内川をせき止め、右岸堤防下にある樋門から水を取り入れ、用水路はその後、庄内川右岸堤防に沿って 1 キロメートル程西流し、五反田橋(昭和 54 年 3 月改築)のところで内津川に合流します。

今度は同橋の下にある堰によって、せき止められ、内津川右岸に設けられた取水口より再び庄内川の堤防下をくぐり上条町地内の幹線水路へと導かれています。

五反田橋の庄内川堤防下用水路わきに水神碑が立っています。これは、昭和 3 年 3 月に建てられたもので、高さ 1.5 メートル、横 0.5 メートルの石碑です。

水神祭は、毎年 5 月上旬に現地で神主、役員等が集まり、用水期間中の通水の無事と五穀豊穰を祈願して行われています。



上条用水堰堤

昭和 59 年頃 吉根橋の上流に用水取り入口があったが、入り口を下流に替える工事が施行されている所
上流に見える吉根橋は旧橋



五反田橋近くの水神碑

人々は水神様を祀って洪水が起きないようにと祈っていた。

④ 桜佐の霞堤 (かすみてい跡地)



【参照(P456) 19 庄内川の探訪 (4)治水と水利用 ⑥上条用水】

内津川が庄内川と合流する五反田橋の辺りは、よく氾濫が起り、松河戸まで濁流が押し寄せたことがあったそうです。そこで、内津川堤防の左岸に霞堤(定内地からの高さ 1m、長さ 30m、幅 6m の土製堤)がありました。

霞堤とは堤防をあえて途切れさせ、洪水時に切れ目から水を定内地(桜佐町側)に少し流し込ませたり、逆に本流に戻したりして、堤防が一気に決壊して大被害が起きるのを防ぐ役目を果たすものです。

強固な堤防が築けない時代の知恵で、古くは戦国時代から全国各地で設けられました。

松河戸の「ヨゲ堤防」や「喰違い堤防」も同じような意味を持っています。

桜佐の霞堤は、平成 18 年 12 月の内津川改修工事により消滅しました。

【参照(P457) 19 庄内川の探訪 (4)治水と水利用

⑦くいちがい堤防、ヨゲ堤、霞堤】

③ 行政による治水対策

① 新川洗堰(しんかわあらいぜき)

自然堤防の時代は、毎年のように洪水が起こっていました。大雨で川の流れも大きく変わったりもしました。

そこで微高地に家を建てたり、ヨゲ堤防などで村落を守ったり工夫を凝らしてきました。

庄内川の本格的な治水事業は、慶長15年(1610年)徳川義直の名古屋城築城と共に始まり、現在の堤防位置に堰が築かれたといわれています。

その後、新川洗堰の築造と新川の開削が行われました。

新川は人工河川(放水路)で、それまで庄内川に流れ込んでいた複数の川の水を名古屋西部(名古屋城)からそらし、増水時には、新川洗堰を通じて庄内川の水を迂回させる目的で作られました。

これは、瀬戸地方を中心に窯業が盛んになり、その原材料としての陶土の採掘磁器を焼きあげる際の材料として木材が採取されたことにより、山林が荒廃して流出土砂が増大し、川の流れが悪くなり、河床が徐々に上昇し、直接庄内川に流れ込むことができなくなり、一帯が湿地化するとともに支川の洪水も発生していたことによります。

尾張9代藩主徳川宗睦により、天明4年(1784年)に着工。

庄内川の北堤を長さ40間(約73m)にわたって半分の高さに切り下げて、大水の時には庄内川の水をこの堰から分流し、新たに開削した新川を通じて伊勢湾に流れるようにしました。

天明7年に完成したこれら一連の治水工事は「天明の治水」とよばれています。

これにより、上流に位置する松河戸も下流の流れがよくなったことで水害も減ったと言われています。

(清州14カ村の総庄屋丹羽義道たちの直訴や、勘定奉行の水野千之右衛門の建白書の提出などあって、宗睦は工事に着手した。)

洗堰とこれに続く新川は庄内川の右岸(北)側に作られましたが、当時の庄内川の堤防は、もともと左岸側に比べて右岸側の堤防が低く作られており、これらはすべて名古屋城下を水害から守るために考えられたやり方でした。

明治時代の改修を経て長らく利用されていましたが、平成12年(2000)9月11日、1時間93mm、11日未明から12日までの総雨量567mmという記録的な豪雨(東海豪雨)により、計画高水位を上回って洗堰から越流した洪水によって新川で破堤し、越流が続いたこともあり、流域の広範囲が浸水被害を受けました。(p145の上写真)

参考資料 中部地方整備局 庄内川河川事務所

小田井人足

江戸時代のこと、庄内川が増水して危険になると、尾張藩は名古屋城下を水害から守るため、役人をつかわして川向こうの小田井(おたい)村の堤を切らせることを命じました。小田井村の人々は、堤を切れば自分たちの家や田畑が大被害を受けるので、表面上は一生懸命働くふりをし、実際には少しも能率を上げずにわざと時間をのばし、ひたすら水がひくのを待ちました。このような史実から、怠け者を表す「小田井人足」の語が起こったといわれており、宝暦7年(1757)5月洪水の時より起こりました。

現在、小田井の地には遊水地が整備され、庄内川下流域の洪水被害の軽減に寄与しています。 庄内川河川事務所



新川洗堰の場所



手前が庄内川、奥が新川

新川洗堰、小田井遊水地(庄内緑地公園)
国土交通省 (昭和62年)に撮影

② 地蔵川(巾川)の改修工事

地蔵川は春日井市の金ヶ口池に端を発し、追進町付近で八田川のトンネル状にくぐる構造となっており、新地蔵川にそのまま流下し、新川に合流し庄内川と並行して港区の伊勢湾に注ぎます。

地蔵川の川底は低いので、河道は全区間にわたり掘込み河道形態になっています。

かつては庄内川に繋がっていたのですが、川底が低く庄内川が増水すると逆流して地蔵川が越水した

ものでした。昭和 32 年 8 月の春日井の大豪雨では勝川、長塚町辺りが冠水しました。(バックウォーター現象)(P144 の写真)

そこで昭和 33 年に地蔵川の改修工事が行われ、庄内川へ流れている水を新川へ流れるようにしました。(右図)



合瀬川と地蔵川の合流点

この合流点から西へ流れる川が、新川となる。
国土交通省 (昭和 62 年) に撮影

③ 小里川ダム(おりがわダム)

小里川は天瀑山(標高 777m)を水源とする庄内川の支流の一つで、大正時代より 3 箇所の水力発電所が設置されていました。

小里川は氾濫が多く、被害を防ぐためにダムが計画され、都市河川化した庄内川流域(名古屋市、瀬戸市、春日井市、多治見市、土岐市など)の浸水被害を防ぐためにも、昭和 54 年に着工、平成 16 年(2004)3 月 31 日に竣工しました。

小里川ダムは、洪水調節を行い、河川環境の保全などのための流量の確保を図り、発電を行うことを目的とした複合ダムです。

④ 河川改修

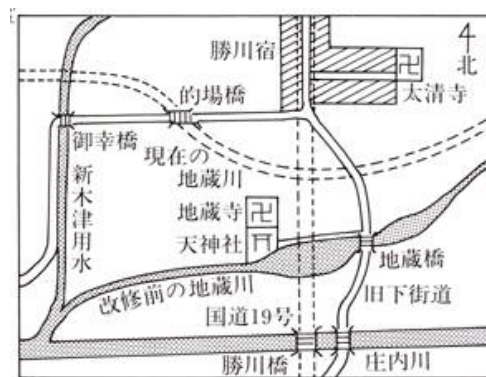
最近では、平成 12 年(2000)9 月 11 日の東海豪雨により、庄内川、新川の堤防が決壊して多くの被害がでたので、国では「激甚災害対策特別緊急事業」として堤防の嵩上げ工事などを実施しており、松河戸の堤防などもこの時に補強されています。

(P145 の上写真)

平成 23 年(2011)9 月台風 15 号では、庄内川名古屋方面の志段味地区などで越水があり、また春日井の地蔵川と八田川の交差あたりでも越水があって、周辺は大きな浸水被害を受けました。

この時、町田町、小野町の地蔵川の川沿いでも溢水が起きました。(P145 の中図)

復興工事が行われ、庄内川越水があった下志段味、上志段味地区、吉根地区の堤防を 2 m 嵩上げ補強する工事が行われ、また地蔵川と八田川の交差点では八田川堤防の 1 m 嵩上げ補強、川幅の拡張、地蔵川ポンプ場の新設などの工事が行われています。



郷土誌かすがい第 50 号 地蔵川物語



小里川ダム 平成 20 年撮影

⑤ 川の監視

治水対策、環境整備など一級河川の庄内川の管理は、国土交通省地方整備局庄内川河川事務所が行っており、また、地蔵川などの管理は県が行っています。

清掃活動などは地域住民一体となった事業も行なわれており、「川をきれいにする」といったボランティアグループなども多く存在しています。

川は災害をもたらしますが、人々に潤いももたらしてくれます。川近くに住む人々は、自分たちの街を流れる川に、より一層の関心をもって暮らしていく必要があります。

毎年各地で河川氾濫による被害もたらされています。行政では水位観測所、監視カメラを設置し、リアルタイムにインターネット等で危険レベル情報を提供しています。

緊急時には地域ごとに避難情報を出していますが、個人々々も、水位情報を確認して自主的な対応が求められています。

春日井市内の庄内川、地蔵川関係の、●水位観測所と○監視カメラ(令和2年8月現在)

【庄内川】

- 志段味水位観測所 名古屋市守山区大字中志段味字舟場
- 野添川合流点カメラ名古屋市守山区下志段味天白
- 志段味観測所カメラ名古屋市守山区志段味真光寺
- 内津川合流部カメラ愛知県春日井市上条町5丁目
- 東名阪下流カメラ愛知県春日井市松河戸町
- 勝川橋上流カメラ愛知県春日井市勝川町1丁目
- 水位観測 内津川(桜佐樋門)

【地蔵川】

- 水位観測 地蔵川(八尻橋上流)
- 勝川水位観測所



第1回目の庄内川での水防訓練の様子
昭和41年6月15日 春日井市
(向こうに見えるのが庄内川橋梁)

(3) 防災意識の高まり

松河戸区では、明治35年頃消防団(水防団)が組織されていました。団員は20~28歳までで、昭和30年頃まで続きましたが自然消滅しました。

その後、市指導により区会での自治消防団として発足し、町内会編成により一時中断しましたが、令和2年度から再開しました。

近年、全国各地で集中豪雨が発生し、大きな被害に見舞われています。松河戸区では、毎年市が行う水防訓練、防災訓練には区民全員に参加を呼びかけています。

松河戸区としても、自助、共助、公助という災害の基本理念の基に、区民が災害に関する認識を共有し行動できるよう、平成元年(2019)松河戸区防災マニュアルを作成し、それに基づき自主防災組織であるところの自主防災会を立ち上げ、防災訓練、防災講座を実施し、防災意識の高揚を図っています。

【参照(P377) 16 自治組織 (4)区会の活動内容 ②安全安心】

大規模開発による丘陵地の開発、水田の宅地化などや、気象変動による想定外の大雨により、最近では毎年のように河川の氾濫が起き被害が出ています。

明治以来、治水の基本はダムと堤防であり、水を河道の中に治めることに力を入れてきました。それも限界が来ています。防災情報の収集・伝達方法、日頃の防災訓練、住民の意識の向上など、地域一体となった総合的な取り組みが求められています。

(4) 洪水被害

(表 1) 庄内川の洪水(春日井市に大きな被害が出た主なもの) (松河戸に大きな被害が出たもの)

発生年	内容
1460年(寛正元年)	洪水により上条用水及び堤防破壊 523m
1494年(明応3年)6月	十五の森の伝説を作った洪水
1624年(寛永元年)6月	大雨により上条村地内堤防破壊
1626年(寛永3年)8月	大雨により上条村地内氾濫
1629年(安永8年)8月	暴風雨により、志段味、上条、味鏡村地内堤防決壊
1661年(寛文元年)	洪水により、上条用水の元枿と堤 264間が決壊する。
1666年(寛文6年)	大雨のため濃尾の諸川洪水、15万 5350石の被害を受ける。
1673(延宝元年)10月	庄内川満水
1704(宝永元年)6月	上条村御油東で 180m 決壊
1706(宝永3年)8月	上条村御油東で 90m 決壊
1721(享保6年)7月	大出水氾濫 堤防破壊 4千 m
1722(享保7年)9月	伊勢湾台風級で被害甚大 破堤 2万 m
1750(寛延3年)4月	八田川破堤、味鏡方面浸水
1757(宝暦7年)5月	洪水 庄内川など堤防 1361か所破損(小田井人足の語この時より起こる)
1767年(明和4年)7月	3日間続きの大雨により、猪子石、比良、大野木などで堤防破壊
1779年(安永8年)8月	大暴風 上条 志段味 味鏡地内堤防決壊
1781年(天明元年)8月	大雨により上条村地内堤防決壊
1784年(天明4年)8月	暴雨により上条村地内堤防破壊
1791年(寛政3年)9月	風水害倒壊流失家屋約 6千戸
1839年(天保10年)8月)	大雨により高蔵寺村地内の堤防決壊、大留村杵ノ口で堤防決壊
1844年(弘化元年)8月)	上条村北御油で 140m 破堤
1846年(弘化3年)7月)	大雨により下津尾村地内の堤防破壊
1850年(嘉永3年)8月)	上条、下津尾村地内で堤防破壊、松河戸村、勝川村、神領地区洪水
1853年(嘉永6年)8月)	大雨により神領村地内で破堤決壊
1854年(安政元年)5月)	暴雨により松河戸村地内一ツ橋で堤防決壊 215m
1854年(安政元年)8月)	大雨により神領村地内で堤防決壊
1855年(安政2年)8月)	大雨により高蔵寺村地内で堤防決壊 大留江向堤防 80間決壊
1855年(安政2年)8月)	大雨により上条村地内で堤防決壊
1856年(安政3年)8月)	暴雨により勝川村松ノ内で堤防決壊
1857年(安政4年)8月)	暴雨により勝川村東切野と西切野で堤防決壊
1859年(安政6年)6月)	大雨により松河戸村地内村中で堤防決壊 208m
1863年(文久3年)8月)	大雨により勝川村松ノ内で堤防決壊
1865年(慶応元年)5月)	大雨により上中切、上条で堤防決壊
1867年(慶応3年)8月)	大雨により松河戸村地内八反田で堤防決壊 183m
1868年(慶応4年)5月)	入鹿池決壊 庄内川も 17か所決壊 松河戸も被害 (入鹿切れて千人が犠牲)
1868年(明治元年)8月)	暴風雨により神領村、上条村、下津尾村、志段村、松河戸、勝川地内で堤防破壊
1870年(明治3年)9月)	暴風雨により堤防決壊(春日井一揆の発端となる)
1883年(明治16年)10月)	上条村で 220m 御油東で 240m 破堤
1884年(明治17年)7月)	大雨により 5か所堤防決壊
1894年(明治27年)4月)	雷雨激しく八田川出水、橋堤防に被害
1896年(明治29年)8月)	風水害尾張郡内 被害全壊 48棟
1896年(明治29年)9月)	高蔵寺、勝川、瀬古地内で堤防決壊、赤痢大流行 (勝川地区降水量 9月4~11日 591mm)
1897年(明治30年)9月)	高蔵寺、大留で 100m 破堤
1898年(明治31年)6月)	大留 135m、桜佐 170m、瀬古 160m で破堤
1906年(明治37年)7月)	大雨により志段味、大留、桜佐、勝川・瀬古地内で堤防決壊
1911年(明治44年)9月)	大雨により高蔵寺村地内で堤防決壊
1912年(大正元年)9月)	暴風雨により高蔵寺村地内で堤防決壊、東春日井郡役所倒壊
1934年(昭和9年)9月)	室戸台風
1957年(昭和32年)8月)	春日井市内の大豪雨 長塚町、勝川町冠水、松河戸橋大破 半年間中央線不通
1959年(昭和34年)9月)	伊勢湾台風、松河戸も被害大きく倒壊した家数戸、庄内川、新川 13か所破堤
1961年(昭和36年)9月)	第二室戸台風 下津の辺りで洪水 小野小学校大きな被害
1989年(平成元年)9月)	台風 22号で庄内川上流(多治見、土岐)で観測史上最大洪水で支川等の各所で氾濫
1991年(平成3年)9月)	台風 18号で地蔵川で出水、支流内津川の破堤
2000年(平成12年)9月)	台風 14号による集中豪雨で庄内川、新川沿川 11,900戸が床上浸水(東海豪雨)
2008年(平成20年)8月)	8月末豪雨では、岡崎市で県内で過去一番多い 146.5 ミリ/h の雨が降る
2011年(平成23年)9月)	台風 15号により、志段味地区で越水、内津川、地蔵川で越水、松河戸道路冠水
2014年(平成26年)8月)	大雨による内水氾濫で松河戸地区の調整池のあたりが浸水、道路冠水

昭和 32 年 8 月の春日井大豪雨

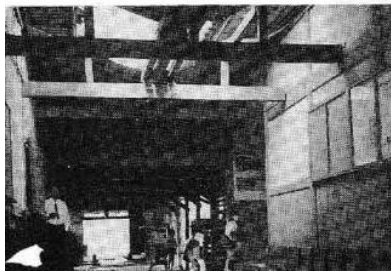
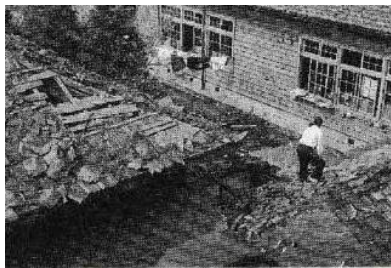


水に浸かっているのが長塚町、勝川町あたり
向こうに見える橋が勝川橋
中央線、地蔵川の輪郭も見える。 春日井市
バックウォーター現象がおこりました。



中央線の庄内川橋梁は橋脚の一部が壊れてしまっ
た。橋の真ん中辺りに、被害確認か応急修理をして
いる人々の姿が見える。 半年間中央線不通

昭和 34 年 9 月の伊勢湾台風



天井に穴



瓦の山

伊勢湾台風で被害に遭った小野小学校

伊勢湾台風の思い出

学校でも被害が大きく、たくさんの瓦がとび、天井に穴があいた所もあった。
最初は青空教室だといって少しの間は喜んだが、雨が降ると、教室に雨水がたまり、授業が出来なかった。
台風後しばらくの間は、瓦や木材等の後片づけを行った。運動場の一角に瓦の山が出来た。
破損個所の復旧に、約半年もの時間を要した。

小野小学校百年の歩みから

(伊勢湾台風)

昭和 34 年 9 月 26 日夕刻(午後 6 時 20 分)紀伊半島南端に上陸し、中心気圧 929.5 ミリバール、上陸後も衰えることなく名古屋市西方 30 キロの地点をかすめ、27 日午前 0 時過ぎ日本海へ抜けていった。

春日井市では、午後 9 時 18 分に瞬間最大風速 53m を記録した。

昭和 36 年 9 月の第二室戸台風



下津の庄内川付近 春日井市



下津の庄内川付近 土のうを積み上げているところ

平成 12 年 9 月洪水（東海豪雨）

平成12年9月洪水（東海豪雨）
新川決壊地点の状況



平成12年9月洪水（東海豪雨）
一色大橋付近の越水状況



平成 12 年 9 月 11 日から 12 日にかけて、東海地方を集中豪雨が襲った。
日最大 1 時間降水量 97.0 ミリ、最大日降水量 428.0 ミリ、最大 24 時間降水量 534.5 ミリという、名古屋地方気象台の観測史上最も高い値を記録したこの豪雨は、本市に昭和 34 年の伊勢湾台風以来となる甚大な被害をもたらし、「東海豪雨」と呼ばれるようになった。

平成 23 年 9 月洪水（台風 15 号）

下志段見地区の越水状況



地藏川と八田川の交差あたりの越水状況

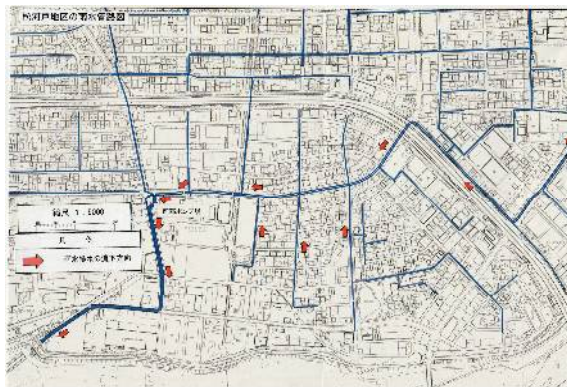


図-2 浸水被害を受けた地域

台風上陸前の 20 日 11 時から 16 時頃には名古屋市から多治見市付近に線状降水帯が発生して記録的な大雨となった。
庄内川の危険水位 6m に達し、14 時に市から松河戸区等に避難勧告が出された。
14 時 30 分頃より道風線の冠水始まる。
避難所である小野小学校には 150 名(松河戸区民 80 名)が避難する。
21 日 13 時に避難勧告解除となる。
松河戸区においては、床下、床上浸水の被害はなかった。

平成 26 年 8 月 6 日の大雨（区画整理終了直前の大雨）

大雨による内水氾濫で松河戸地区の調整池のあたりが浸水、道路冠水、内水氾濫が occurred。田畑が多かった頃は、降った雨は徐々に地表に浸み込み、ゆっくりと河川に流れ込んでいましたが、区画整理がほぼ終わり、大量の雨水が側溝や水路を通じて、松河戸ポンプ場や調整池に流れ込みました。この頃まだ、調整池が完成していなかったため、この様に道路に水が溢れたということです。しかし、近隣の町からも雨水は雨水路を通じてここへ来ます。
全国各地で想定外の大豪雨が発生しているなか、十分なポンプの処理能力と更なる調整池の整備を市に要請していきます。
※平成 12 年東海豪雨の頃は、町中の浸水はなかったが、平成 26 年では町中での浸水が多くありました。



雨水排水の流下方向 春日井市上下水道部



平成 12 年東海豪雨と平成 28 年 8 月の浸水状況
南部浄化センターに設置してあるスピーカー可能範囲が参考記入
春日井市上下水道部

(5) 渡しと橋

① 仮橋の時代

江戸時代の渡河は、「徒(かち)渡し」か「渡し」が基本でしたが、松河戸と川村を結ぶルートはこの地域の主要経路であったので、渇水期には仮橋が設けられており通行人は相当あったものと思われます。

また、川の向こう側にも松河戸の新田があり、小幡・川村から嫁入りした人も多く、地域住民の往来も相当あったと考えられます。

現在の松川橋の下流約 150m の浅瀬を笹舟(小舟)により運行し、江戸時代、渇水期には水の深い部分だけ板橋を設けて人馬を渡していたようです。

享保 5 年(1720)に橋がかけられたことがありましたが、「勝川の渡し」との権利争いから、取壊しとなりました。

(当時勝川村は宿場の機能があり一帯に大きな力を持っていた。右写し参照)

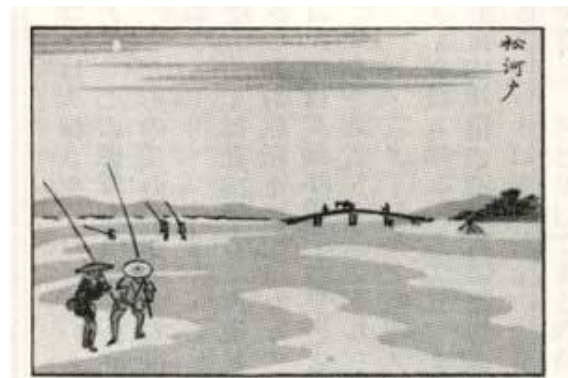
明治時代は渡船が主流でしたが、兩岸に綱を張りそれを手繰って操船していたといえます。

大正 6 年に仮橋ができました。

その後 1933 年(昭和 8 年)に流れの部分にのみ欄干のない木橋が架けられ「松河戸の渡し」は廃止となりました。



竜泉寺から庄内川・松河戸方面を望む(昭和 8 年頃)
中央に本流のみに架橋された松川橋。奥は中央線(西線)庄内川鉄橋。



松河戸釣人(『名区小景』三編より)

庄内川で魚を釣る人が 5 人。下流の流れの狭いところに木の仮橋が架けられ、馬を引いた人が渡っている。

はるか向こうに鈴鹿と伊吹の山なみが見えることから、西方の下流を見て描かれている。

一、享保五年十月初時分松河戸村ニ而新橋掛り、篠木村、廻状ニ而在、往來為致候ニ付、時之庄屋安右衛門渡願書ヲ以テ御代官井田源助様ニ差上候処、御國方屋野七右衛門様、平岩七太夫様、旗形善左衛門様、右御三人衆様申上候得ハ、御国方郡方ニ被仰付、両村共吟味致、新橋取払申様ニとの御事ゆへ、郡

『春日井市史』 第三編 近世庶民史料より

方飯嶋重左衛門様、大田庄左衛門様、黒田文右衛門様、御三人衆ニ井田源助様と立合、黒田文右衛門様御屋敷ニ勝川村、松河戸村庄屋寄候而、勝川村庄屋安右衛門、組頭六左衛門、善右衛門右三人、松河戸村ニ而ハ伴右衛門、弾七、権十、長右衛門右四人立合、御吟味之上ニ而、松河戸村庄屋中不残あやまり手形ヲ致シ新橋取払、永く松河戸村ニ橋懸ケ往來致事不成と被仰渡候、願書十月廿六日ニ上り、新橋取払十月廿七日夕々廿八日迄ニ取払、橋道具不残松河戸村ニ御預ケ可被成候、以上

「勝川の渡し」との権利争いから、取壊しとなった時の写し

春日井市史 近世庶民史料より

② 本格的木造土橋(松河戸橋)

それまでは川原に降りて、人ひとりが渡れる小さな橋でしたが、昭和 13 年に直径 30 センチほどの丸太を橋桁に使い、松河戸の堤防と川村の堤防を繋ぐ長さ 290 m、幅 4.4m の本格的木造土橋(松河戸橋)が完成し、自動車も通れるようになりました。

その時の人々の喜びは今も語り草になっています。



昭和13年開通した松河戸橋 その時の人々の喜びは今も語り草になっています。松河戸誌研究会

昭和23年に名鉄バス春日井線が開設され、守山から松河戸を經由(松河戸橋)して、上条、鳥居松を結ぶ路線を走っていました。

しかし、この橋は、昭和32年(1957)8月の集中豪雨で大破してしまい、補修しながら利用していました。

名鉄バス路線は、昭和35年以降は勝川橋から松河戸を經由する路線へと変更されていました。



松河戸橋は、昭和32年の集中豪雨で大破

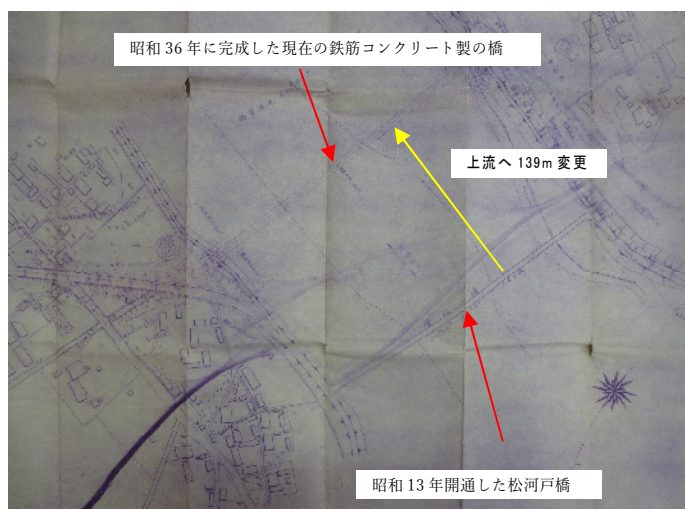
③ 現在の鉄筋コンクリート橋(松川橋)

そこで恒久的な橋の計画が持ち上がり、昭和36年に、この上流139mのところ到现在の長さ297m、幅7mの鉄筋コンクリート製の松川橋が完成しました。

松川橋の完成により、松川橋バス路線も一部復活しました。

建設当時は歩道がありませんでしたが、昭和47年に下流側に、そして昭和51年に上流側に歩道ができました。

この松川橋が架かっている関田名古屋線は、春日井市中心部と名古屋市街地東部を結ぶ幹線道路となっており、平成6年(1994)主要地方道に指定され県道30号線となっています。



現在の鉄筋コンクリート製の橋設置場所の見取図



旧木造橋から建設中の現在の橋を見る(写真は昭和35年)

昭和13年に架けられた自動車も通れる立派な木造橋であったが、昭和32年の集中豪雨で大破した。向こうに見えるのは現在の松川橋を建設中である。旧橋の上流139メートルに掛けられた。



松川橋の建設 写真は昭和 35 年
昭和 36 年に完成した現在の鉄筋コンクリート製の橋(松川橋)を架ける工事中



完成した松川橋 写真 昭和 36 年
完成祝賀の渡り初めが行われ、関係者や大勢の子どもたちが橋を渡っている。



▲平成17年頃 木橋の松河戸橋を取り壊した跡
庄内川に残った橋の杭い柱
令和元年時点でも、2〜3本の杭い柱が僅かにのこっている。



・向こうの土手は松川橋上流へ上がる関田名古屋線
・人が歩いている道は、以前の松河戸橋に上がる旧関田名古屋線 (写真は平成8年頃で区画整理前)



現在の松川橋
両側に歩道が設置されている。(写真は令和2年)

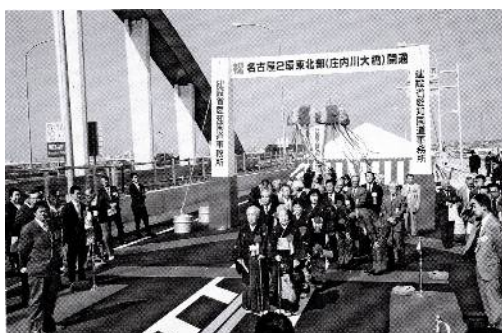
鉄筋コンクリート橋(今の橋)についての思い出(昭和40年頃)

小野小学校の遠足で守山の緑地公園へ行くことはあまり無かったのですが、橋(松川橋)が完成してからはよく行くようになりました。今は、両側に歩道が設けて安全ですが、その頃はありませんでした。

橋を渡るとき「車が来ませんように」と願うのですが、そうは行きません。トラックなどが来ると皆(先生も)橋の手すりにしがみつき車が過ぎるのを待ちました。今でもその時のトラックの振動が忘れられません。

しばらく経ってから、歩道ができました。

④ 環状2号線の庄内川大橋



※名古屋環状自動車道

名古屋市外周を走る環状一般道として昭和32年に計画された。昭和42年に自動車専用部(高速道路)を併設する道路に都市計画が変更され、以降、順次各区間が開通していった。

※ 環状2号線の庄内川大橋の開通式(平成6年10月)

写真は、勝川〜名古屋守山区喜多山の庄内川大橋区間の開通式の様子。

渡り初めには、3世代の夫婦が揃った一家、または高齢の夫婦に先頭で渡ってもらう習慣があった。

めでたさにあやかり、橋が長く保つように願う意味があった。

(6) 美しい川

① 庄内川の思い出

小野小学校の校歌(昭和 29 年校歌制定 歌詞・中部中学校校長 安藤直太郎氏、作曲・瀬戸高等学校 森下千秋氏)に「流れも清き松河のみなかみの空虹かかる」と歌われているように、昭和 30 年代前半までは清流で鮎・うぐい・はえ(オイカワ)などがよくとれ、投網や釣りが盛んでした。

松河戸の子どもたちは川遊びや、駐在所のお巡りさんに川へ連れて行ってもらい泳ぎました。

庄内川の水質は、昭和 30 年代から 40 年代にかけて、陶磁器原料、糊葉生産、製紙工場等の排水や、生活雑排水の流入により悪化しました。

松河戸から上流は、白濁水となっており、下流はパルプ排水独特の硫黄化合物で何とも言えない異様な色をしていました。

その後、昭和 45 年に制定された「水質汚濁防止法」の排水規制や下水道整備により改善されてきたこともあり、現在では河川敷でのスポーツ、散策など市民の憩いの場所になりつつあります。

○ 庄内川での水泳の思い出 昭和 30 年代前半

小学校低学年の頃、夏休みに入ると松河戸の交番のお巡りさんが、松河戸の子どもを集めて庄内川へ泳ぎに連れて行ってくれました。昭和 30 年頃から 35 年頃だったと思います。

まだこの頃はどこにもプールが無く、松河戸の子ども達は、家から知多の海水浴場へ連れて行ってもらうのが唯一の楽しみでした。

もちろん日帰りで朝 8 時ごろ家を出て、昼前に現地へ着き、海辺で弁当を食べ、3 時ごろまで遊び、そして帰ってくるのです。

しかし連れて行ってもらえない子もいるため、お巡りさんが庄内川へ連れて行ってくれました。

昼食をとって、1 時頃交番に集合しました。

10 人ほどで、今の松川橋と 302 号の橋の中間あたりの流れの緩やかな場所に行きました。

川の水はきれいで川底まで透き通っていて、みんな友達おし水泳を教えあったり、きれいな小石を集めて遊びました。

(お巡りさんから泳ぎを教わった覚えはありませんが、見ていてくれたのだと思います)

高学年の子は、網を持ってきて魚を捕まえていました。おおきなナマズ、ウナギ、鯉をとらえて、河原でみんなで食べました。

この頃、うなぎ、なまずは多くいたようですが、鯉は珍しかったようです。

1~2 時間くらい遊んで帰ってきました。1 週間に 1 回くらい連れて行ってくれたと思います。

川の水は高学年になるにつれて汚くなってきたと思います。

高学年になると、中部中にプールができ、小野、勝川、鳥居松の 3 つの小学校も交代で使わせてもらえ楽しみにしているのですが、夏休み中で 3 回くらいしか泳げませんでした。

小野小学校にプールができたのは、昭和 45 年でした。



(昭和 32 年に春日井市で最初に春日井小学校にプールが造られ、市民向けには昭和 35 年に春見町に春見プールが造られました。)

○ 庄内川で見た風景

川の中をのぞくと、いろいろな色の小石が見られました。
 川の水が小石を洗うので、常にキラキラと輝いていました。
 川辺一面にも小さなものから大きなものでは直径 10 cm ほどの石で覆いつくされていました。
 水はあくまでも清く、鮎ののぼる姿も見もみえます。

河原を見回すと、中州や川辺から離れた所には、あちらこちらに砂の丘ができていました。

砂の丘には線路が敷かれており、大人たちがトロッコで川砂を運び上げて、待ち構えているトラックに積んで運び出していました。

その作業にも休みの日があり、その時トロッコは子供の遊び道具となっていました。

昭和 30 年代頃まで、庄内川の河原では、砂、砂利、礫石の採取があちこちで行われていた。

この頃は、建築ブームで砂利の需要が高まっており、下津には県の採取場があって機械によって大量の砂利を採り、戦前に鳥居松工廠設置の時に敷いた線路を利用してトロッコ列車で春日井駅まで運び、そこから貨車で搬出していた。

しかし、松河戸の河原まで伸びていたトロッコ列車の線路は、既に戦争中に撤去されていた。



昭和 25 年頃
向こうの大きな船は砂利取の舟



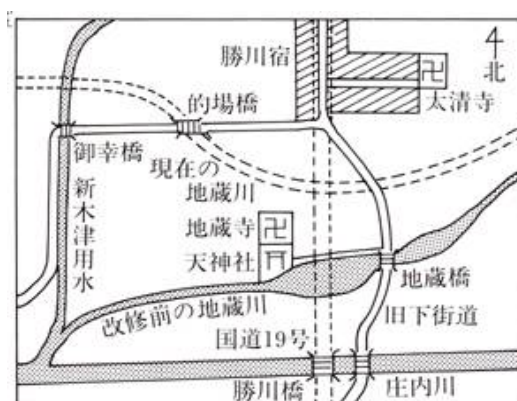
昭和 35 年頃の風景
向こうに見える山は御在所、養老山脈

② 地蔵川の思い出

松河戸の川でもう一つ忘れてはいけないのが地蔵川です。

勝川橋の北方約 300 メートル、地蔵川に架かるこの橋を地蔵橋といますが、昭和 33 年に改修工事の始まる前までは、この川は約 100m 南方にあり、土地の者は川を「地蔵池」、橋を「どん橋」と呼び親しんできました。

どん橋は土橋が訛ったもので、昭和初期には名古屋の森下から坂下を結ぶ乗合バスもこの橋を通過しており、橋の両側はひょうたんの形の如く川幅が広く膨らんでおり、初夏から秋にかけて貸しボート遊覧も行われていました。



地蔵川に架かる地蔵橋の西南、地蔵ヶ池公園の東に石碑が建っています。

昭和42年10月8日、勝川西部土地区画整理審議会が建てたもので、幅約80センチメートル、高さ約1.5メートルと縦長で、題額には「地蔵池懐古碑」とあり「愛知県知事桑原幹根書」とあります。題額の下は次の通りです。

この池は往昔の醍醐荘勝川村発祥の池である。改修前の地蔵川は沼をなし俗に地蔵池と称していた。大小の魚族が蕃殖し、かつてはとくに尾州侯の禁漁池として広く知られていたが、明治維新後は一般庶民に解放された。

しづかな池面に釣糸を垂れる人も漸く多く、池辺の天神社、地蔵寺等の古風な景観と相俟って、のどかな情景はこの地における一種の風物詩として郷人のいたく愛賞するところであった。

里伝によれば、今を去る七百余年前文永年中、池中より地蔵尊の靈佛が出現されたので、承久役の忠臣山田明長公を開基、無盡禪師を開山第一世とする瑞雲山地蔵寺を池辺に建立したといわれる。

爾来幾星霜、地蔵池は大雨ある毎に池水氾濫し、近傍に多大の水害を及ぼしたので、遂に寺を現在地に遷すに至った。茲に郷人地蔵池懐古の情にたえずその由来を石に刻み以て不朽に伝える



地蔵池懐古碑

池も寺も変えてそのかみの
葦の葉ずれを聴くよしもなし
安藤直太郎撰書

昭和初期、川幅が広がった地蔵池と呼んでいた所には貸しボート屋がありました。

地蔵川は、市民の憩いの場であり子どもたちの遊びの場で魚もたくさんとれました。

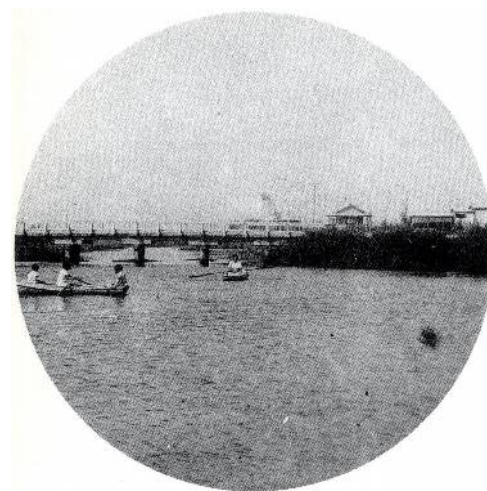
5

昭和28年に王子製紙の操業が始まると、この地区は工業系地区に指定され、地蔵池も埋め立てられ工場の排水によって死の川となってしまいました。

ここを通る時の異様で強い悪臭は今でも忘れることが出来ません。

桜が咲いても、川がきれいになる前は花見などできませんでしたが、今はすっかりきれいになり、鯉も泳いでいます。

春になると土手に植えられた古木の桜が昔を思い出すように嬉しそうに咲いています。



昭和初期の地蔵川（地蔵池）

勝川町1 地蔵池遊園地

現在は埋め立てられ川になっている

向こうに見える地蔵橋は現在も残っている。

写真図 郷土誌かすがい第50号 地蔵川物語

《参考資料》

写真と図表で見る松河戸 松河戸誌研究会
春日井市史 地区誌編 松河戸
庄内川河川事務所資料
郷土誌かすがい第50号 地蔵川物語
春日井市近世村絵図集
庄内川 春日井の文化を育くんだ川

松河戸文化科学探求隊

隊長 長谷川 浩

080-3657-7052

松河戸町の沿革ホームページ

<http://matsukawado.com/>